翁反故　一名花屋日記　全

へ 5
6639

翁反故

[illegible]日記

72 9
籍

へ5
6639

〈2002-28〉

門 利
號 723
巻 除籍
帝國圖書館藏
東京牛込區大久保余丁町百拾弐番地 井内雄藏
明治三十六年十一月五 井内雄藏氏寄贈

芭蕉翁花屋日記序

後の一むかし此花屋某か後庵ハ芭蕉翁終焉の地なりと聞つたへられ
今ハむかしとなりて宮古文小星をうつりぬ其名ハ沢ふ家人志ら於なり
行ぬ元亨釈書曰人ヶ壇留適者也と誠なるかな此に滿川氏史録を携
正蔵か秘記を書写せし事を喚し給ひて尚縁者に其蔵を志らぬ人なれ
は花屋の後庵芭蕉翁此終焉の実記を見ることを得ずして深淵を探りて拝する斧
世に其花を志らぬ人なる然かも新旧記まて此日記ハあやなかなか傳りあ
らぬとけふ風雅の眞令をいふ事も是を得てぞ実に先生の篤実にして
翁生涯の事実を書記しおのつからしるべき事なり誠に歴々高き事ハ志
たきしまこえさ其逸話にみなる事も其此草枕桜鳴蝉鳴行かれ春秋
ハ風雪に行方さだめず漂泊二十年此晩の夢もつくに涙し終りける
両翁かしこまでなみなみならぬ事ともいへども様々なまし今風花雪

翁反古

月日は行かふ翁の茶毘より此年百有余年なれ二百値遇の因

と縁となし此書を出すへし

文化七秋八月十五日

東肥　六隠文暁識

松風の軒をめくりて秋くれぬ　翁

毎年九月廿一日浮瀬の亭にて松風の会式あり花菴より頼りにしたふ此句の俳諧を興行するなり

翁反故　上　花屋日記

肥後八代　僧文暁　著

浪速　花屋菴奇淵　校

九月廿一日泥足か案内にて清水浮瀬の茶店へ伴ひ給ふ茶店の主か需に応し絶筆にて打興しおはしましぬ泥足ニ会して何事もなくおはしまして発句せらるゝは

所思

此道や行人なしに秋の暮　翁

峡の畠の木にかゝる蔦　泥足

哥仙一折有略

是翁大人の絶筆ならん哥仙一折にて止む今度は老衰にて西国へと思ひ立ちおはしましけるかいとゞ世の中のはかなさを思ひつゝけてなれ

ききてや此句につきて此ころ惟然に様かはりたる心あり

旅懐

此秋は何で年よる雲に鳥　翁

此言きハ朝より心に籠て神おもひとに思ひ入人間世の観念なりけん是より
旦念ふかく身失せたる人の物思ひ下五文字古今未曾有なり

惟然記

廿六日園女亭ハ山海の珍味をつくして、園女は婦人ながら風雅を志し、
風の流を守る真実の風雅の婦人なり、実ハ伊勢松坂の人とぞ、風雅ハ洛陽
に学ひ、まりといふ事をも知りて、園女は惟中の弟子の俳諧をよくし、
時惟中が妻と聞かし時より風雅の名高かりし、又惟中が死後浪花
にのぼりて、ゆかしき人と聞えけり

白菊の目に立てゝ見る塵もなし　翁

園女

紀の國の芝柏亭に於て

芝柏九人一会仕りお記

惟然記

廿九日芝柏亭ニ一集あるべき約束なりしが、数日打続て重くなりしかば、
芳章を寄せられし、発句おくられけり

秋深き隣は何をする人ぞ　翁

此夜より泄痢の病にて、吐瀉の病なり、兼て泄瀉の気ありけるなり、最早北海ならんと
おもひて、薬師の申す茶湯を絶えさせけれど、詰なく晦日朔日二日と
相勤めし所、数度につかる事の程なりけり、惟然支考
門人は、いかなる良医なりとも相談して、師の京の名医
なり、人の心得ぬ醫者に任せて薬方を用ゐる人、我惟ハ木節なりていふも
の也、所々未節を急ぎて、今は世にある人を集め、一日に昨日の世の事を

菜

きこともあ人なまへ早く消息をおくる處しとへまより弟人消息をもつて
此京大津にて德のつかしける者あるに之首ハ直ハ徒にて外に召所
も多く西人數入ことて保養仕候ひ申ましくとて其所此と申
ちなかりわれ志る人ありて御當家方人々在所兼往にあらずと右
の裏甲發を贈り交り間所にて嫁りて方々へ向て挨拶有之奇特なり
諸る傳手を得し交渉共にて御仕抱まりて花色に極りぬ以之
時節十月三日之

次良兵衛記

四書車庸睦止訊升舍羅何件等を城の病に宅を志し之濁家
にいりたりし家労甲方事を之處より修行て苦陀をまゐる
病死ふ[illegible]はつきつけ弱れ人々もうとりと憐み一般に百數とハ
り紙を出し且に傳來の斷り悲事し

風の處に積りて忍びし以下之こにあり

次、良兵衛記

次良兵衛

机帳 右者人用限後家覚并諸道具之覚

戊十月四日

一 机一脚
一 金盥二口
一 [illegible]五張
一 膳十人前
一 釜 二口
一 茶瓶 二口
一 茶碗 十
一 [illegible]丹庖丁 三本
一 薬鍋 二ツ

一 硯一面 墨一挺 水入小刀
一 帚二本
一 枕五ツ
一 [illegible] 三口
一 [illegible]箸 三
一 火[illegible] 二口
一 茶碗[illegible] 三口
一 菜[illegible] 一口
一 研木 一本

一 摺鉢　一口
一 水嚢　一ツ
一 盥　二口
一 行灯　二張
一 挑灯　二張大小
右

一 炭斗　一ツ
一 油徳利　一ツ
一 手水盥　二口
一 懸行灯　二張

一 白米　一斗
一 醤油　一升
一 炭　一俵
一 紙　一束
一 塩　一升
右

一 味噌　三升 赤白
一 薪　拾束
一 油　一升
一 雑紙　一束

一 座敷料　三分二朱　松波
右 仁左衛門方ゟ受取申候
[illegible]

十月　日
惟然
支考
去来様

猶々御状之趣本意ニも伝授候以上

今般之状相達し拝見候　先以其地弥御堅固之由珍重ニ存候
一　妻相中二十餘枚之通致承知候　随而国事御座候　然処
已後ハ猶一搬之中ニ者を入申候　何方ニ可然様
被致候三十余枚致承知候　然者　右之状悉皆拝見　本意ニ御
伺申候ニ付　右ハ何れも其方へ御出被成候
入御覧候以上

十月二十二日

惟然

去来様

猶々大津之風雅何方へも宜敷候　弟者方へ本意ハ急ニ
とも可申候　伊賀へ之様子　拙者ハ在所江帰候者共伊

致候よりはやまく之あり候ハ今年も夜ふけ候

三日廿七日伊賀へ参候日数ハ去年より二百餘之状二日之
御頼申候打立法度ニ而　世上之時ならしまより御打楽ハ新作
ニ成之ハ其の時ありしと書付候程ニ集り候事ニ相談仕候
ましたハ其の事ニ付候と諸事ニ思之人ハ承知之ぬくもりなく
ニ承知之趣ハ申さす候けれハ子共迄もおもふことなく詳史
御ハ四月日そ参之おもひあまりハ三日見されハ十日ほとおもひ出す志ゝ
致候所を堂境ニ而雑談の葉数の様子聞及再会いたし度おもひ候
ニ御座候事兎に角去年より有之候ハ去来ニ志つしを旅出せし
が暗く兎て云僕ハ世務ニいとまなけれハ世話ニまかせてつくさず候かく候

ち鶏さへの内意を惑るゝ生さへ降り出卯楽しと粉河の湘にむせ
ぶ河根本集れ韻語んまと称しやて去来文情息を遠めて衣柳波よ
木曽につきた

支考記

同三日程子の時過ついて木曽寺着る二百七十九人の惣息を清兵世話
大清を丑の時に立一番舟に宿しと経日内惣に生遠慮諸子に届毅もれこ
くすまて来て内根本を傾く内脈を暁出て十方遊逸近局を調へ

支考記

習鉄木曽れやしすることより飲館人参半夜修修町法足陀より九日く包
食十五歳に至れより三次方より世話まて洗濯志めさせやと此州の乃花鶏
兵部来て宛の元鶏をもとく園めしより内菓子藕形恩を送る支考惟然所
抱河良兵衛出て手伝くてに三次にかりまくし此とて金銭百文と云より来る

按摩なと雇るに今日三十文宛までにおよふ故まし菓子急使重なり

次郎兵衛記

五日朝丈草乙州正秀去来て暮気日暮る霊宿に出でし川作の由急ぎ
やや時くに慰ての此河の朝次郎兵衛たゞ後に詰まを貸る返帰る秋
菊蒲盆久しく五條来去年精進二升施主升味噌二斤米二十束
花二十把日雑用三菜なり今日此所あり酒奉麺二箸あり料華
をとに五十文におよふ

次郎兵衛記

六日夜明気味よしまだ館の病人数三着出秋役宵寝入めきれ
格く睡眠しならぬ内因さめより去来をちめて先志寄先の近隣ゆら
支考惟然参集りし大井川に改作せし句

大堰川波にちりなし夜の月　翁

此句あまり京ちかきよしといへど大井川此句に似たりとて少し力を入ずと
おもひなやみ給ひし清滝にて

清滝や波にちりこむ青松葉　翁

と作りなほし給へり是を青松葉なりと人のいふ人もいふなれど
ハ大井川の句を捨給へる人と淡にやかへり志らずは此園女に換れ
る事

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

此頃も是又園女亭にて吟句也此句大井川の句に似たりとておの二
句を一句に捨給へり今又此句を捨しおきはん人とおもふ
心洗ひといふ人去来須も知らずへ名近のごとく名を惜しみ給ひき実し
おふるまゝに幾句一章にさまでに千万言費しけらは御病
悩の中此句吟ひ風雅此情こそ尊きと見る眼はかの信在

されば此句を青松葉青松葉と見て捨られしなれども此句を青松葉ならど
いやまの人とやまの眼りに京の句ハ此句に京情なきに侍りて
句意を見て時ハ二句ともにおなりかねこゝに我ハ句の意を目
に見る句の姿を見れば青苔日厚自無塵こゝにこれ隠者の言
儀をほめたる語今ハ園女がいまだ若くして陋上葉此調あるをほ
めたる吟なり意も妙なり語も妙なり世人此句を見ずその園
の清貧を知らん波に散りこむ此語ハ左太沖か非絲與竹山水
有清音といへる絶唱にもまされり園ノ二丈にまさへる賞翫と大
井清瀧の強弱と二句の風わたりつけてはあまりありと申
せしかバ先師も機嫌よくおはしける

去来記

七日朝より不如意の暖気なり昼よりて西南葉す遊ぶほかに加減

まつ八景を好みぬ小園より見渡して菓子等贈らるゝ次
第兵衆所付て二次に贈る色紙来る事来に題を撰て園の
所由清川来る事来其方の和歌絵日景をめさて絵日景の枚
になりて贈る和歌又て人貴まちつゝあり合せ候所のとに人々ゆる
てねてりけるは衆所正保当事来りけるに候設待りし家下
の数とゝなりせねば此所の風雅いづくになりけむ後の人事来然してし
はうりしくも来る此事山に心をかけりし由思ふ二百年後見捨し初ると思
き年くれ多り人々にさねいふことや此あらんは今秋つ来静あり此今記
神子おもしまさは四次候おもいつなりし国位の俳諧をせむとて来つる人と会
静に枕上に同じくよりて指導をたまひしに一方より銘次所兵衆を書きて
おはされ息つきたまひての後まて俳諧の変化をまなび出しきのれとも
事行ても年は三つせ事来る者は三つ目ありして一千変万化を示すはまつくえの趣

きめぐらさば此は古格はとゞまらし地なき枝に事あられ地とは心は杜子美が
志をおもひさらは翁上人の心をしらん調は葉わが言葉なりつゝしいへ
まつらん家は世にありとおもひ其数他に化せらるゝ事なきを是こそ
今まで見[illegible]にうるまうと嘆きてまいらせは今月作にさうるれ
又葉をそへねらせて志つまりなまふみ葉をそへて此枕を書く

惟然記

八日に此映晴出のなく京北[illegible]士来る信徳より沙見までお病祈
可ふ日を次の角上より御事ある人々様子此ありて今設の所方に参候を
祈りまふ人と会住吉大明神に見中より人を立てゝと来中におくられ
けるは各志すべしと之次此兵衆は露香にて社務林家の方に祝詞を
なのこ厚く神納の事をおもらはゝ各供

奉納

落つきや から手水して神あつめ　木節

神霊にやらぬ手向も旅の雲　正秀

時雨は野の鴨のきゝなりや流れ木に　丈草

起さるゝ声もうれしき湯婆哉　支考

あ仙や波につきたる床まなき　乙州

居所なきていさみつくしき厚薬かな　伊年

引はりかゝに竹の名やしやされさい　惟然

神なれはうちのやや松の風　之道

日本中見まほしきか雲の菜　てゐ

はろしは花さゝ石やもむ　去来

大坂の集会なりけるはよろこひ無して翁を慰めなかりける木節去来子申さるゝは御病を何見申に深手に移り哀ならんと見へて候旨申

し是初は痢より起り泄瀉なるとも根元脾胃の虚にて大切の痢疾なり故に逆気之為す主方なり従又かつ減していかさに薬力ひかへ候へと頻ならは法をも他医にもとめんとおもふ去来師にはすみやかに木節か申条もねとるもいはゆる仙方にて先生の鍼灸を医にとらせて薬は人々も世人の気かく性にはあらす我呼吸の通ふ人ならはいつまても木節か神方を用ひん世人の心にかなへる心なしとのたまひける風流の徒人ゝ百えなるゝとのたまし支考て翁去来に向ひてのたまひけれは去来心得て病床の伴をたのしらむて申す去来より時代のやす多く大坂に辞世をたのまれは名匠の辞をいなりしやと世にいふまじけれあまた一句を諸方の沙汰門人の辞世のまねもなし申す者多く辞世を作日の辞世はあまたの辞さ乱生涯の辞一句ゝとして辞世ならさるは一句も辞世をもいうみと問人あらはいま此いのち一句いつまてなりとも辞世なりと申

聞えけれハ諸法実相示寂おけるハ是釈尊の辞世として一
代の御法も此二句より外ハなし　古池や蛙とひこむ水の音　此句を我一風
興せしより初て辞世なり其後千々の句を吐にいたるまてハいつく
せまつて句を辞世なりといへるハ句も辞世ならすと申侍るへし此句ハ浮世の口を問
ほかに去る此集の書侍りぬふは清所に言微妙の翁の風人ならざ
るを知る所也

支考 記

翁ハ今嵯峨の理所治くより柿を贈り来る渋息に侍日まて伊賀
より音信して去来ハ京中に詮ハ懸て庭卿をもてなさすし浪ニ中
ることハ師の云永慶道の事なとして安穏なる事の将百里の飛脚おもひ立
御様子よりもはまとん保に世ハ永遠なり何太病とも申おりなる一
報中此去ちき時に主公の申しめさしも悲何り急ひ何段大切におよふ

此を論したる事しとの事ハあり沙汰の急の体をも見合せて設数六
十段におよふ

惟然 記

九日諸子の取まとめひとしき事ふるまひ衣裳又粉骨ある七物の治つきて
浄万をも従ろつしよまう衣を召せらへすおらせ中師日永遠地浪滿九
伊かり示菩提の安穏境を枕にて事終をなさるへき事のかゝる身のくしま禅の
うへにてもの未来の友となりてはしく思ひ入るもを受すまたとして本望へ
丈草去来と只晩夜目のあハれなる事不斗案入て旅舟に書せられ名
詠聞えへ

旅に病て夢ハ枯野をかけ廻る

枯野をめくる夢心ともし侍るハつたなき辞世になるへて辞世を
にいふて蘇ものられし病中此吟ハ余儀なくして死の一大事をおもひ並な

ぶらいの生涯なりし一風流ハいふならも妄執の一つといふへからす
人伝ハいふ事ハ去来云たゝちに日々飲食も官の日におこたり此程野
翁ハみるに出立のをきて心身風雅なるかなしかる江海の患につかれ給
ひなからもおのか生涯を風雅の名誉を唱へなかむる諸ふ?かれまこと
ハ池の中の水ちえ未代の亀鑑なりと誰も深く涙をなかしけれハ翁見
ハ鏡を見さむ耳をきゝあらそきてハ毛髪にいたるまて動かさむ別世の
為に此悦然として御弟子たる翁一代の生涯なりけり此日より翁
更ニおもひ入翁へ(?)の遺教をたまふ

去来 記

十日 初時雨せり 翁枕の傍にありけれハ遺教のなきを知りて不断に申入
おのれハ浄土の信心(?)ありてもとより世を遁れ侍る身なれハ 本意の(?)芭蕉葉(?)など
請まいらするにおよはすとすみやかなる事ありけれハ保養をなさしめ

翁の本意かくて剃去されと頭巾に望ませ給ひ西念やむことを得す
ぬけ髪の一房ハ味ひてやゝみて本意を胸裏にうけ遊行の頭ちら
支考なりと云 目の下剃ましつて人こゝちつきたまへ今日ハ一夜庵し
ゐまそかりき

惟然 記

十一日 朝より時雨おもしろく 朝晩(?)の空の雨もよひ 東武の
紀同じくて集まりの席に翁の絶吟を打みくり風雅の流義に打入(?)
はせをの労りおもて見るほと浄安たつきまかり
更より病床にまゐりて皮骨を立ゝてのほる病を見すかせそうつ
挑ひ具まいらする翁も見やりなから涙もゝろにまいりて袖を潤しみな
も之句なく されとも文なかりし支考去来丈草去来(?)文秋(?)次の日
よ病の中の床に於ひとくる状態をなかめて 御でおまいるよりも

ゆすり起ぐる楽しみけるに夜の明くるまで阿蘭陀あてゝよく粥をも
すゝめ参らす人ゝ咳しきかほりけり皆ゝ喜び合ひて疾く棲にけさ
すゝめまゐらせ中ゝさ耽りて快くめされける朝より正来の庵に移り
出て猪まゐらせて去来悦びつゝ人ゝおもしろくて
病中にはなりすこし言名のあり　去来
去来曰師の病を見るにとめおき給ふに此きみて咳を慰めまゐらせ
人深く案じ給ひと頃ゝ自ら作り給ふ惟然は其状を病と二人まて一ゝ
蒲団をも誂へり寝にのせ奉る人々はこゝろくだきて終状様いら
まりぬ其夫を受くは去りしと嘆ゝ参りけるに程を生ぐ笑ひはてそ
ひつそりと蒲団に寒き咳かな　惟然
おもひよる枕がみしたし冬の雨　正秀
一座是をきゝていつまでもと律とやらいふ程に師にも笑ひ給へり　今晩も

かくれ給ふは
十二日の
夜のうちの事
と見るべし

さる程に十日已来は甚う熱出させ給ひ神しられ給ひけり人々恐れて
時毎日ゝにはかに蝿おもしろく目覚の群あつまりて人々驚きて
蝿をさし払ひけるに師の見ゐるを見おはしき蝿ど無しくおぼしてと大病
中の事なれば忽ち清めまゐらせ無く庭所に拾ひ支考は師の誉をさ賦
ほど一ゝ来せ人の額の上をはしり病者にあるやうなるを見あそせ
給ひけるに目様種のまた深くて中ゝ也清らかなと去来にやなり竟に
去来は今年師の心中せむすゝりと夢見大事にはり小さくしも文字残
中ゝさぬ師は夜も名ゆらしきに好みおもて居日断ま神を見
清きりて諸人嬉しとおもふ中に御代は遠ふもとやせ中毎に花心
と労る世中年奇怪ありとは病床ちかくより給ふ所の申く鹿残
立まつらへと称へる其間の弟子に立まゐる文殊は去来まのいひし
て諸子の中おぼ明きうしなかんに惟然は打まもりと弟子共にこたへ

此文句諸本に見へず 杭尾本集に 露とりてなめし てかに起かず ことなきへそれも さむくなきつくれ とあり

事のへといふ事

志うし楠家 此の留守に居られ 文武

さる文武形りそれは何もなれやめひておりしかりなむなり 木蔭

露とりて菜飯 てなり

皆子なり 太子

うつくしき菜れともれ とさそれ 元年

吹井より 解せやまへむかしくさ

一つ惟此此部しを進ハ師太子なり とうし設とのさとなりて太子なく

さ仕より いつやてはさひせり 湖まり西むりしと志ハ人生け部まで

答のいはいはりいつまかきりし 梅嶋の幕 文をすへいひきた 木蔭一人

拙せいふける辨る見へを進ハ土前元都せるとも 木蔭云 病子除中耽

御をいつる何り大病中 後食なりた 俄に疾れ出てむとするハ 悪疾なり

形部達たりなりといひける 大きれかさてめさかねてまた 彼は夫りより文を

出現来なりて 彼此にわかりて 音色土のやく見へかひ 始くハ何 しゝ人と見志りて

またさりしくや 何って文事 ぬをなり たまひ たなす公路で丹ういえより

ハ次郎兵衛いそくまゆらせさく付抱し 縁なく 棋なり けき さ ハ十二日より 京へ

茅部りかいし二人すへて此障子を通て北かりをさせ 共前去来 文子なり

是へと来る 何子見給ひ 様をたくらきを 昭尺志てき さとけてわりけ此所

出世とふ次て 木蔭郡の頃り 判志をさとて 志て今の子のみなりふかむ 思やむこと

とき居て湯をひらせ 人のもせ 見むり 産を 志川うにつらくてか木蔭を 勢術

を尽されし 事何とつゝしに 諸志なをまひ 妹三人の元をそく 紀さをきと

也所 正成を 左右す 文武惟此子 菓をやくらし 事なき文もとなれとて あらし

と進てゝ 名を 病者も 心り見へ あす御 今 音 呉の おきむを なかをを

り 伊賀の進ては 年つとて 謀なかしいひ 印を京に 足利 原に 違 ひされ そうとなり

子共々てしきりたるを　臨終を四人中にて草紙を調べて都羽の病
喘にて　のひを枕に次良兵衛拝書中あやしむさゞめかせ
ありや稲前去来子むかひあやしむ先師暇水門落葉まで法恵子を
御見舞丹後の大学乙州丈草共道し清見寄あれといふ椀もろ扇の
いふもいかさま稲前雲井此寝所にはなしはりぬ彼らが精魂の落所説
労好くいずれも枕を残る紀浪すまおかせり見ぬ扇浪風流
思へ此すなはち安きをある語津えおさまれかしとて綴りゐひて
昇て形空華たりし観音経ときこへてかすかに息のうちよりいとと
尊くありける中此刻るを埋もので見たり代さむる如く眠る枕き
まねをせなきたよりかくりて葬入ねひぬと知る木様ふ心元すで居
瞑目つきぬひとり時より元禄七甲戌十月十二日申の中刻行年五十一歳なり」
即刻に亡骸を清め長櫃に納めみなともせ一葉川舟にて伏見ま

でとげなる今日に其角去来丈草乙州正秀木節惟然支考
立花呑舟次郎兵衛以上十人其夜にかの京へ荷物をば送り長
櫃の前後左右を守りすれ念仏誦経相勤め伏見にて八幡を過
る頃根ふらしと雨まなみけて酒李雨のかかりたへ至て丹門に逢され
はいさとなき深枝そとにはすねる紀かうかうりして程なく京橋につく
此より根たさにありかう急ぎて支考とも十三日巳の時過ぎて大津
の乙州が宅子入つりたりて乙州は伏見より先立ていそぎて帰り宅
残後を掃除し手こ女沐浴の用意をなし沐浴は立花呑舟次郎兵衛
なり法躰の遂ひさせる事へは正秀丈草法師がたのみ申たり御法衣
御衣などは智月と乙州が妻縫立てる御衣ひとへにさせ筆とも若
きそ衣の形つくる事にや御筆色の衣とすべき
筆色を見せ翁の筆墨の

せつ丹なるこゝろより送葬八十四日と定り除服日限になりにけり

大坂を出しより夫婦惟然ハ二百日に位也此状蘆庵ちの備中伊助子息雨翁

て箕子に一ちまいしより志らせけれハ其辛ひと頼つかハしけるに此僧

故ありて翁の百日より剃髪なし帰りけるにや亡き師の法名を

清水夫婦十百日伊賀上野より人何ヶ残せつきたれハ右の状を仕也右

なり此状十二百日上野にて土芳卓袋ひらき見るに

り大坂にて一句を残しけりあえれ松尾氏に集り其状ハ其日時に書

状を世にと云夫より先人をしのびてみるに二十のてらの刻よりくみて

要用をしるせる也仍而ひとり大坂の出張まて見きたり見きたりけるに

門人ての手なれハ残りしを小海の高角之枕打とゝのひたれハ其

枕の下の袋に昔年に書とどめし文を見出して志るしてあなと

川の地方を望見
此ハくらり祚を古
て翁と人々
十三日とくらり
者を訪ひ
なる

し是よりくらり祚を禅定ハ大坂まてハ九月に入て一年をすてらハれて是に

手を世にくらし祚を禅定信住西念坊に旅て急にハ九日に伊賀より

しの鯉をうち参りけ出に久かに脇を相つけるハ十二日に着て

ゑなり其の地に旅の宿る状ハにそれと云ひに佐立て志なくと首

にも人とかに諸宗まはりなくほらハ葬送になりともし辞退して

まつりし文ひとのへ八時迄けりて葉に也訪ひけれハ二度く

飛宗り仕見京橋にてハ状のく書に寄下り相合すかり義仲寺に

其ハ未入彼所のさるをまへりけれハ誌を寄りて北枕のうるハしき

を相しなから世教数をまつり形く一秋に病床にて臥尺せる事を加へ

給ひしを川因縁の深きことをさすに悼り有りて嬉しく侍りけは

なかりけり

土芳
卓袋 拝誌

十二日曾子佐見を出舟し来る所に昌房探芝牧玄曲翠等ハ去秋
〈よりて行違ひ来るやらむ秋頃ハ大坂に来去てを旅にまかせた
諸子臨終をもまりありて後に行逢ひぬと中より去子又十二日の宜舟大坂
よりこ可亡秋頃の別に佐見につく秋半に大津に帰る

昌房拙語

義仲寺ハ遺言なるよし八葬送なり三井寺相住坊より方丈三人
まゐりて修経念仏ありて丈様ハ去秋頃の別あり法の人道
伊賀の人一左右をまつ秋の人窓に左右あし去来其角乙州
して葬式いよいよ十四日夜丑刻とおもひ立ぬ小より集人
会葬のくく催にひらえ人数凡三百人餘あらむ
集る者物見にまて立ても時も小雨の降りて
足を清誦をして湖水の雨にかくる深り隆のまつ

嗚ハ世常此嘆きとおもひて古寓居に到りし時の露なと
のといふ事ともおもはくにはかの蕉翁も失橋のあと
する事もなく悲人のまゐりて独世なり涙を流す

支考記

引導香語

雪月魁鮐風花精神等閑一句驚動人天嗚呼
奇哉芭蕉翁哉芭蕉萬里雲一輪明月五十
一年一字不従

各拈香

丈草　其角　去来　李由　曲翠　正秀　木節　乙州
臥高　惟然　昌房　探芝　泥足　之道　芝柏　牧玄

尚白　去芳　卑㕝　許六　丹野　風國　野童　游刀
野明　角上　胡故　蘇葉　靈葉(椿)　素蟬　田鳥　萬里
誠々　遠望　荒雀　捷江　木枝　朴吹　魚光　文好

諸國代香之記

右のほかなにはの中に在京大坂並尾張伊勢其外の國々より京
なとより馳つる諸國此人々三世値遇の縁をおもひ〳〵に香を向
たまはり枝(?)百人といふ數しらず境内狭き故に表より入裏へ人をうらへ
ぬけ出なからも去つてハ亜田の川縁に列をつぎこれハ忘れぬ人とまたいへる
裏へぬけゆく人(?)そさうして讀らしきを聞(?)て葬埋をいとなみ子の時過に
なりゆくを翁をまて其夜の通り木曽塚の右のかたに埋葬し奉り
けり
十五日去来丈艸を始として所大津の人々葬送諸事先として去来何

其卿塔をうつし奉り古葉の塚のうしろに年ふりたる柳のあるを
もし此名の形見や事枝に花芭蕉を一本植て此をみいふ芦(?)
木の下に塚をとりてせと此にて植て垣を結ひまはして兎なと
島内なりと供日此すと後しといへとも去来が木曾塚菓子の垣に
こ其尾(?)其葬は絶頂に涙ふ人は赤人此むのいふさきらね事也
の下に寄ふ處を床(?)に一人ゆりかな

寒(?)をあらかしめ是ハ其事に似拂ふてふ処手へ(?)
その奇ものをほり其所縁して般年(?)に此事をうち以下市坐
深川の後ハ常芭蕉の一此(?)なる事額(?)中に見し十本
後ま(?)其後右の通りもの多くおもむかふ處し十月中ゆ(?)

十月十(?)

桃青　立

此一帖再形添付(?)
和兵衛　雲子(?)
次郎兵衛　芝(?)藤子
さ(?)ろ　根(?)誰子
十右衛門　半(?)右子
半(?)兵衛　去芳子

松陰先生ノ稿

新識ハ獄中ニ著ス

明治廿三年五月十七

某生写

講孟劄記上冊